

中山間地域の早生タマネギ栽培に関する実態と意向

[要約] 中山間地域でのタマネギ栽培に関するアンケート調査によると、平均家族労働力は1.5人/戸、平均作付面積は25a/戸で、圃場は未整備で狭小な畑地が多い。また、耕起、畦立て整地作業以外はほとんどが手作業である。マルチ張り、定植、収穫では疲労感が高く、作業の機械化等の要望も強い。

総合農林試験場・経営部・経営科

専門

経営

対象

根菜類

分類

指導

資料名：平成12年度 九州地域試験研究成績・計画概要集（農業経営）

[背景・ねらい]

中山間地域の野菜産地の維持、活性化を図るため、早生タマネギ栽培農家を対象にアンケート調査を実施し、産地の実態及び意向を把握する。調査時期は1999年(平成11年)7月、調査対象はJAながさき県央たまねぎ部会293戸で、回収率68%であった。

[成果の内容・特徴]

1. 調査対象部会は長田・諫早・本野・小野支部で構成され、1999年度の農家数は293戸、作付面積は7,213aである。
2. 農業収入の多い部門は、露地野菜と米で、合わせると76%を占める(図1)。
3. 作付面積が40a以下の農家が90%を占め、平均は25a/戸である。また、畑地が89%、整備済み圃場が23%で、一筆平均5.4a程度と狭小である(図2)。栽培品種は、超極早生、極早生、早生の早生系品種が80%を占める。
4. 平均保有労働力は1.5人/戸で、60才代が約1/3を占める(図3)。雇用農家は全体の64%で、平均雇用日数は23.2日、うちタマネギは21.7日である。
5. 今後の作付については、現状維持が52%、規模拡大したいが13%存在し、作付中止と規模縮小は2%である。また、栽培継続予定年数は、10年以上が27%、4~6年くらいが26%、3年以内が18%である。
6. 耕起、畦立て整地作業以外はほとんどが手作業である(図4)。
7. 作業の平均疲労度は、収穫、定植、マルチ張り、葉切り、根切りで高い(図5)。また、機械化、作業方法改善、共同化、機械共同利用の要望も強い。
8. 今後の取り組むべきこととしては、土づくりの推進と作業の機械化があげられる(図6)。作業の機械化に伴う栽培様式の変更や単収減少に対する農家の意識は、機械化による規模拡大や労働力軽減効果を重視する傾向が伺える(図7)。

[成果の活用面・留意点]

1. 中山間地域の早生タマネギ産地の展開方向を検討する際に活用できる。
2. 現場での機械化等の意識啓発に活用できる。

[ 具体的データ ]

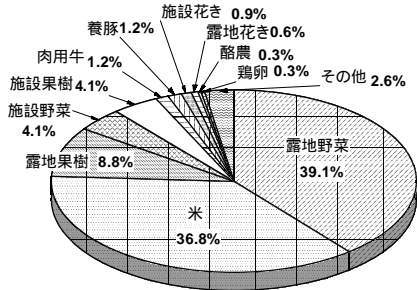


図1. 農業収入の多い世帯農部門数構成  
(ただし収入の多い方から3部門を回答したものを集計)

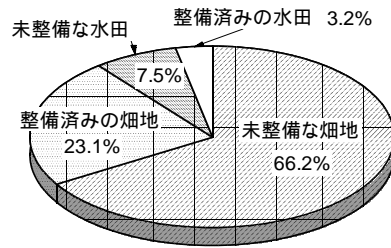


図2. タマネギ栽培圃場の地目と整備状況

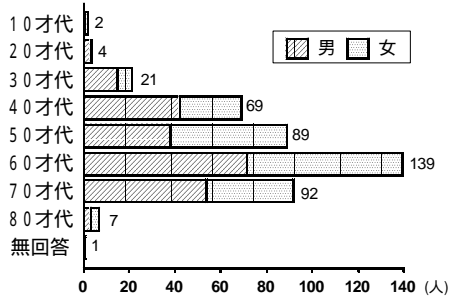


図3. 家族労働力の年代別・性別構成

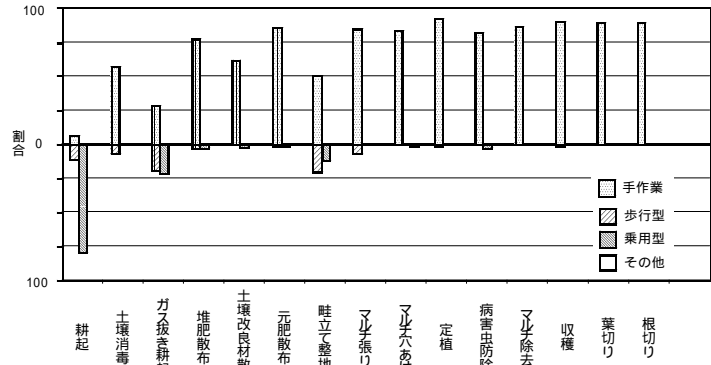


図4. 作業別の作業方法の実態

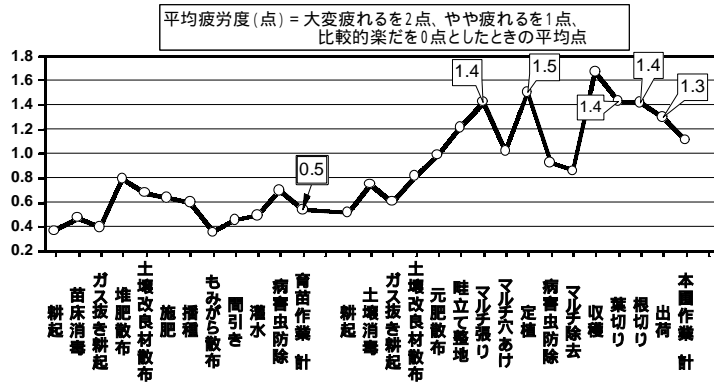


図5. 各作業の平均疲労感

- 土づくりの推進
- 作業の機械化
- 集出荷体制の充実・強化
- 新しい栽培技術の導入
- 圃場整備・ばらつき圃場の解消
- 基本栽培技術の徹底
- 流通・販売対策の改善・強化
- 共同育苗・収穫作業の受委託などの推進
- 市場・消費者の情報収集
- 雇用労働力の確保
- 後継者の確保
- 県・市町村・農業団体等の支援機関の充実・強化
- 部会組織の充実・強化

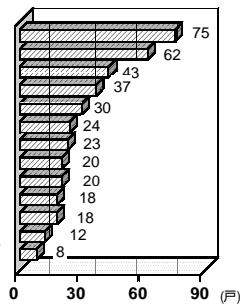


図6. 今後のタマネギ栽培で重要な事項

- 機械化すれば面積拡大が図られるので、機械が使える栽培様式にしたい
- 機械化すれば労力が軽減されるので、単収が減少しても機械が使える栽培様式にしたい
- 収量維持のため、慣行の栽培様式を続けたい
- わからない
- 無回答

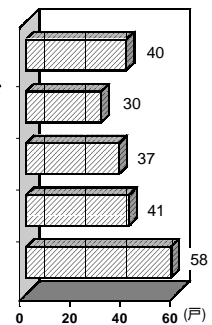


図7. 作業の機械化と栽培様式変更・単収減少について

[ その他 ]

研究課題名：中山間地域資源を活用した省力・低コスト農業技術体系の確立

予算区分：県単

研究期間：平成12年度（平成11～13年）

研究担当者：鳥羽由紀子、寺島正彦

既発表論文等：なし